

「総括 明治から敗戦まで」メモ

●日露戦争に勝利した日本が、なぜ40年の間に太平洋戦争を始めて敗戦の運命に？

▽日露戦争と太平洋戦争では 何が違ったのか

私が感動した話 憤慨した話を軸に

▽連合艦隊長官山本五十六(昭和18年4月18日薨)国葬の日

海兵校長井上成美は生徒に話している

「物事の判断は快刀乱麻を断つが如く、常に先の見えることは余人の追随を許さぬところであった。誘惑に乗らず、世論、風潮に惑わず、世評は問題にせず、思うところを判然と言明し所信に邁進した。山本がそれが出来たのは、自分の答えを持っているため、他人の出した答えに引きずられなかつたからだ。私心がないから正常な判断が出来たのだ」

▽「日米戦うべからず」を訴え続けた 山本の本質を
これほど 端的に指摘した 見事な言葉はない

重光葵は吉田茂を評して

「あの人は、そこにある土瓶でも茶碗でも、すぐ持って駆け出す人だよ」

▽吉田こそは 終戦和平に 命懸けで駆け出した人

●時代背景、雰囲気、人々の考えがわかる日記類

永井荷風の日記(昭和8年正月)

「二、三年來軍人のその功績を誇ること甚しきものあり、古来征戦幾人回(いくにんかかえる)とはむかしの事なり、今は征人悉く肥満豚の如くになりて還る」

▽ちょっと前の軍縮の時代 軍人は小さくなつて
ソフト帽をかぶり 背広に着替えて外出

▽満州事変(昭和16年9月)で 軍の威光が輝き出した途端
夜の銀座 新宿のバー・カフェーに 軍服姿で

古川ロッパの日記(昭和19年9月4日)

「ならんでる ならんでる 黙々として ならんでる 雜炊食堂の前に 男・女・こども ならんでる あり得ない！ この行列の中に一人でも き

山本 五十六(やまと・いそろく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。駐米武官、航空本部長、海軍次官歴任。日独伊三国同盟に反対、昭和14年連合艦隊長官。開戦劈頭、機動部隊によるハワイ真珠湾攻撃を立案、実行した。前線基地視察中、ソロモン諸島上空で戦死。国葬。死後元帥

井上 成美(いのうえ・しげよし)

明治22(1889)～昭和50(1975)宮城県生まれ。海軍大将。比叡艦長、軍務局長、航空本部長歴任。昭和17年海兵校長。19年海軍次官となり終戦に尽力

重光 葵(しげみ・まもる)

明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。昭和7年中国公使の時朝鮮人に爆弾を投げられ片足を失う。外務次官、駐ソ、駐英大使歴任。18年東条内閣外相となり小磯内閣に留任。東京裁判で禁固7年。29年鳩山内閣副総理・外相に就任し日ソ国交回復、日本の国連加盟を実現

吉田 茂(よしだ・しげる)

明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。外務次官を経て昭和11年駐英大使。20年4月、和平策動者として憲兵に逮捕される。戦後東久邇・幣原内閣外相を歴任。21年首相となり5次の内閣を組織した。引退後も政界に大きな影響力。国葬

永井 荷風(ない・かふう)格 懇

明治12(1879)～昭和34(1959)東京生まれ。作家。「ふらんす物語」、「つゆのあとさき」。大正6年から書き続けた日記「断腸亭日乗」。昭和27年文化勲章

げんのいい人間がいるということは 戦争はここまで来た ならんでる ならんでる」

▽サイパン島守備隊が 玉碎(昭和19年7月7日)して物不足から 行列買いが 日常化していた

清沢 洑の日記(昭和20年4月12日)

「どこに行っても戦争は、いつ終るだろうかという点に話題が向けられて行っている」

▽敗戦寸前の 街の空気が 浮かび上がってくる

▽「特高月報」(内務省警保局)には 圧倒的に多い

戦争中の首相 東条英機に対する批判

…「見よ東条の禿頭」と歌った ……
「愛国行進曲」の冒頭、「見よ東海の空明けて」をもじって「見よ東条の禿頭 磐ゆる富士も眩しがり あの禿どけろと悔し泣き 雲に隠れて大むくれ」。東条内閣が総辞職すると、「米喰糞太郎」と名乗る投書(広島県)が「こら、英機の馬鹿野郎、五十万人の兵隊さんを殺しておきながら、その結果もつけずに大臣をやめて、おめおめ生きてるのか。何故軍人らしく腹を切らぬか。中野正剛氏を切腹せしめやがって、己れ生きる法があるか。馬鹿野郎死ね」

▽中野正剛は 朝日新聞(昭和18年元日付)に「戦時宰相論」

東条に「誠忠と謹慎」を求め

「天下の人材を活用せよ」と訴え 逮捕された

▽東海大学総長の松前重義は

倒閣運動をやって 二等兵として懲罰召集

▽新名丈夫記者(毎日新聞編集担当キャッカ)も 二等兵で召集

「戦局は茲まで来た 竹槍では間に合はぬ
飛行機だ 海洋航空機だ」(昭和19年2月23日朝刊)

▽東条批判をしたために 懲罰召集や

死の戦場に飛ばされた人は 72人も

●明治の時代は、二つの国家目標に苦闘した時代

▽外国の侵略から どうやって守るか

不平等条約を どうやって改正するか

▽明治のリーダーは 世界の中の日本の弱い立場をよく知っていた 現実認識もしっかりしていた

古川 緑波(ふるかわ・ろっぱ)本名 加藤郷郎

明治36(1903)～昭和36(1961)東京生まれ。喜劇俳優。昭和8年徳川夢声と「笑の王国」を結成、エノケンと共に喜劇の黄金時代を築く。「古川ロッパ昭和日記」

清沢 洑(きよさわ・きよし)

明治23(1890)～昭和20(1945)長野県生まれ。中外商業新報、朝日記者を経て自由主義的な政治・外交評論で活躍。戦中日記「暗黒日記」は貴重な現代史資料

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官、航空総監歴任。昭和15年近衛内閣陸相となり中国撤兵に反対、16年10月陸相兼任のまま首相。19年2月参謀総長も兼任したが7月サイパン陥落で総辞職。戦後、拳銃自決を図ったが未遂。東京裁判で絞首刑に

中野 正剛(なかの・せいごう)

明治19(1886)～昭和18(1943)福岡県生まれ。朝日新聞記者を経て大正9年から衆院議員当選8回。昭和11年東方会を率いて全体主義を推進。戦争中、反東条色を強め、倒閣運動の容疑で逮捕され、憲兵隊から釈放直後に割腹自決した

松前 重義(まつまえ・しげよし)

明治34(1901)～平成3(1991)熊本県生まれ。通信省に入り、電話通信の無装荷ケーブル方式発明(昭和7年)。19年、東条批判をして二等兵として召集。戦後、衆院議員に当選6回。東海大学を創立し総長

阿川弘之さん「戦後60年の思い」

「負けてよかったですとは思わないけれど、負けた結果はよかったですと思わざるを得ないことが多いと感じるようになりました。言論は自由ですし、と

▽三国干渉の時 御前会議は

「イギリスなど列国会議を開き、調停して貰う」

▽結核で病床にあった 外相陸奥宗光は

「虻も蜂も捕捉し得ざるの愚を招く」と 反対

▽「列国会議を開けば、てんでに自分の国の利害を主張して收拾がつかなくなり、講和条約が壊れてしまう。三国の言うことを聞いて条約批准を急げ」

陸奥の警世の言葉

「わが国民の熱情は、諸事往々主観的判断のみに出て、毫も客観的考察を入れず、ただ内を主とし、外を観ず、進んで止まることを知らざる形勢なり」 — そのまま昭和日本への警鐘。

●日露戦争でも、元老たちは短期決戦、潮時を見て講和

▽伊藤博文は 開戦と同時に 終戦の布石

貴族院議員金子堅太郎に 訪米を命じる

▽金子は 福岡藩留学生として渡米(明治4年)

セオドア・ルーズベルト(第26代大統領)とは

ハーバード大同窓「ティディ」「ケン」と呼び合う

▽米国世論を味方につけ 講和の斡旋をして貰う

▽金子は 児玉源太郎参謀次長に 見込みを質した

…「まず三倍の兵力をぶつける」

児玉は「どうやったら勝負を五分五分まで持つて行けるかどうかだ。だが、五分五分では勝負はつかん。せめて六分四分にしようと、今苦心しているところだ」そして「最初の戦いは北朝鮮のロシア軍を駆逐することだから、ロシア軍の三倍の兵力をぶつけて絶対に勝つつもりだ。これが成功すれば、勢いに乗ってあるいは六分四分までいけるかも知れん。とにかく、緒戦に全力を擧げる」

▽太平洋戦争では「戦えば必ず勝つ」と豪語し

武器弾薬もろくに与えずに 兵力小出しの失敗

●開戦に当たって、日本の悩みは金のないこと

▽金貨は1億1千7百万円

輸入決済に充てる分を 差し引くと

正味使えるのは 5千2百万円しかなかった

にかく憲兵の時代はひどかった…」

三国干渉

日本は日清戦争に勝利して、明治28年4月17日の下関講和条約で台湾、遼東半島を領有することになった。6日後、露仏独の三国が「遼東半島を清国に返せ」と横槍を入れて来た。ロシアは戦艦28隻を持っているのに日本は1隻もない。日本中が震え上がった。

陸奥 宗光(むつ・むねみち)

弘化1(1844)～明治30(1897) 和歌山県生まれ。坂本竜馬の海援隊に入り、神奈川県令。西南戦争で禁獄5年の刑を受け出獄後駐米公使、農商務相。明治25年伊藤内閣外相となりイギリスとの間に条約改正を実現、下関講和会議全権を務め条約締結。著に「蹇蹇録」(けんけんろく)

伊藤 博文(いとう・ひろみ)

天保12(1841)～明治42(1909) 山口県生まれ。元老。松下村塾に学び維新の志士として活躍。内閣制度を創設、明治18年初代首相。枢密院議長を3度、4次の内閣を組織し元老中の元老として重きをなした。ハルビンで安重根に暗殺される

金子 堅太郎(かなこ・けんたろう)

嘉永6(1853)～昭和17(1942) 福岡県生まれ。伊藤のもとで憲法起草に携わり、貴族院議員、農商務相、法相歴任

児玉 源太郎(こだま・げんたろう)

嘉永5(1852)～明治39(1906) 山口県生まれ。陸軍大将。台湾総督、陸相を歴任。日露戦争直前に参謀次長の急死で次長に就任、開戦後、満州軍総参謀長として陸軍の全作戦に知謀を揮う。戦後、参謀総長になるが脳溢血で急死した

▽戦費調達に 外債募集を命じられた

高橋是清(日銀副総裁)の壮行会で 井上馨は
「高橋がそれをやってくれねば、日本は潰れる」

▽ロンドンでは 圧倒的に「日本が負ける」

戦前の日本公債は 暴落に暴落を重ねていた

▽それを引っ繕り返し

ロンドンでも ニューヨークでも
日本公債に 買い注文が殺到したのは

「鴨緑江での日本軍勝利」の 第一報だった

▽高橋は 8億2千万円の外債募集に 成功する

●明治の軍人に、見事な現実認識と大局観

▽大山巖は 満州軍総司令官として出征する際

山本権兵衛(瀬)に「軍配の挙げ時」を頼んだ
「ロシアという大国相手では、いつどの辺りで終
局させるか甚だ心許ない。軍隊はただ進んでさ
えいればよかろうが、国家はそうはいかない。
時と場合を見極めて終わらせる。その軍配を挙
げる大役が勤まるのは、おはんを描いてない」

▽児玉も 奉天の戦い(明治38年3月10日)に 勝利すると
秘かに上京 長岡外史参謀次長を 怒鳴りつけた

「何をボヤボヤしている。火を点けたら消すこ
とが肝心なのを知らんか」

元老・政府首脳に 満州軍の戦闘力の限界を訴え
「早く戦争を終わらせなければ駄目だ」

▽山県有朋(參謀長)も 桂太郎首相に意見書

山県の「政戦両略概論」(明治38年3月23日)

第一に、ロシアはまだ本国に強大な兵力を残
しているのに、日本は13の師団全部を前線に
出している。第二に、出征将校2万2千人の1割2
千2百人が戦死し、突撃の先頭に立った下級将
校に犠牲が集中、簡単には補充できない。
「軍事的勝利はこれ以上望めないから、日本
が有利なうちに講和を急げ」としていた。

▽ポーツマス講和会議が 難航したとき

紛糾した閣議を 講和に向けて決定づけたのも
山県の満州視察報告「あと一年戦うには、十七、
八億円の戦費が必要で、調達できねば、食糧弾
薬は底を突き、全軍満州の原野に立往生する」

高橋 是清(たかはし・これきよ)

安政1(1854)～昭和11(1936) 東京生ま
れ。仙台藩留学生として渡米し苦学。日
銀副総裁のとき日露戦争戦費の外債募
集に成功。総裁、蔵相を経て大正10年原
敬首相暗殺で首相。昭和2年田中内閣蔵
相となり支払猶予緊急勅令で金融恐慌
を鎮静した。犬養・斎藤・岡田内閣蔵相。
二・二六事件で暗殺される

井上 馨(いのうえ・かおる)

天保6(1835)～大正4(1915) 山口県生ま
れ。元老。明治18年伊藤内閣外相となり
条約改正に尽力。内相、蔵相など歴任

大山 巖(おおやま・いわお)

天保13(1842)～大正5(1916) 鹿児島県生ま
れ。元老。陸軍大将・元帥。陸相、参
謀総長を経て日露戦争では満州軍総司
令官。大正3年から内大臣

山本 権兵衛(やまと・ごんべえ)

嘉永5(1852)～昭和8(1933) 鹿児島県生ま
れ。海軍大将。明治31年海相となりロ
シアに備えて「六・六艦隊」を推進。大正
2年首相に就任、軍部大臣現役武官制を
廃止。12年再度首相、虎ノ門事件で辞職

長岡 外史(ながおか・がいし)

安政5(1858)～昭和8(1933) 山口県生ま
れ。陸軍中将。日露戦争で参謀次長を務
め、第13師団長(瀬)の時スキーを普及

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保7(1838)～大正11(1922) 山口県生ま
れ。元老。陸軍大将・元帥。徵兵令を制定
、参謀本部設立、軍部大臣現役武官制
など軍政を確立し「陸軍の大御所」、「長
州閥総帥」として、政界はじめ陸軍に大
きな力を揮った

●太平洋戦争の時はどうだったか

▽昭和20年2月 重臣として

天皇から 意見を求められた東条は…

— 東条の戦争指導を貰いた「精神主義」 —

「現在の戦況は全体的に成功不成功相半ばすと見ます。敵の本土空襲も、近代戦の観点からすれば序の口です。正義の上に立つ戦いなりと、皇國不滅の精神に立つならば、悲觀に及びません。あらゆる施策を尽くして、戦争を完遂すべきです」

▽昭和の日本は

強いことさえ言つていれば「正義の時代」に

●太平洋戦争で特徴的なことは、情報がどこかで止まってしまって、総合判断に全く生かされないこと

▽東条内閣外相東郷茂徳が 驚いたのは

在外大使・公使の電報は 無条件で即座に
参謀本部に 回すことになっているのに

駐在武官の電報は 外務省には送られない

▽軍部が威張り出した 満州事変以来の慣例

何でも 軍事機密優先 情報が一方通行

… 東条はミッドウェー敗戦を天皇から聞く …

ミッドウェー海戦(昭和17年6月)で主力空母4隻を失い、戦局の決定的なターニング・ポイントとなったが、海軍は厳重な箇口令。参謀本部も前線の士気に影響するのを恐れて、知らせたのは総長、次長に作戦参謀だけ。それ以外は陸軍省にも、部内の情報部にも知らせなかった。
(東条はこの時は陸相だけで、まだ参謀総長を兼任していなかった)

当時、英米情報担当・杉田一次中佐は「九月になってようやく知った有様だ。作戦計画の大本を練るべき者が、こんな大損害も知らずに今後の情勢判断を研究させていたのだから、陸海軍相互の秘密主義がどれだけ戦争全体の遂行を妨げていたかわからない」

▽東条内閣の秘密主義も ひどかった

▽代わった小磯国昭内閣 最初の閣議で

藤原銀次郎軍需相が 船舶 石炭の悪化を説明

桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 山口県生まれ。陸軍大将。陸相を経て明治34年首相なりと日英同盟締結、日露戦争遂行。第3次内閣を組織したが、大正政変で辞職

伊藤博文は

よく「軟論を主張することは難しいが、実は一番大切なことなんだ」と言っていた。何かする時、まず世界の情勢を考え、日本の立場を考え、どうすることが賢明かを判断して、穏やかさと理性で事を進めた。文久3年(1863)、イギリスに密航した時、そこで見た議会、軍隊、工場のショックを生涯持ち続けた。

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950) 鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て東条内閣外相。昭和20年4月鈴木内閣外相となり終戦に尽力。東京裁判で禁固20年、拘禁中病死。「時代の一面 大戦外交の手記」

杉田 一次(すぎた・いっじ)

明治37(1904)～平成5(1993) 奈良県生まれ。陸軍大佐。駐米武官補佐官、英國駐在、参謀本部参謀。昭和19年作戦課作戦班長。戦後自衛隊陸将、統幕議長

小磯 国昭(こいそ・くにあき)

明治13(1880)～昭和25(1950) 山形県生まれ。陸軍大将。軍務局長、陸軍次官、拓務相、朝鮮総督歴任。昭和19年7月首相。東京裁判で終身禁固刑。服役中に病死

藤原 銀次郎(ふじわら・ぎんじろう)

明治2(1869)～昭和35(1960) 長野県生まれ。大正9年王子製紙社長となり米内内閣商工相、小磯内閣軍需相。この間昭和13年に藤原工大(駿河大)を開校

▽重光外相が「こうした状態を、なぜ早く我々に伝えなかったのか」

マイナス情報こそ大切なに

米内光政海相が、燃料について天皇に説明することになり、資料作成を命じられた井上成美次官が軍需局長を呼ぶと、「本当のことを書きますか?」、「変なことを聞くね、陛下に嘘は申し上げられない。無論、本当の数字だ」

前の海相鳴田繁太郎の時は、天皇が心配しないよう、いつも作文した資料を作成していた。マイナス情報こそ、どう対処するかが大切。それを隠していたのでは、希望的観測、精神論が国家の方針を左右していくことに。

●支那事変が始まても、三八式歩兵銃(昭38年翻)が日本陸軍の主要兵器

▽アメリカのギャング映画では ギャングだって
1分間に500発撃てる マシンガン

▽昭和14年 九九式(昭25年)採用の時
「弾丸の無駄遣いをするより一発必中の訓練」

▽ノモンハン事件で ソ連機械化部隊に惨敗し
陸軍研究委員会報告書の結論は「低水準の火力

戦能力を速やかに向上させる必要がある」

▽コストがかかり過ぎて 日本の国力では出来ない
▽本当は この国力の限界を

きちんと認識することが 大切だったのに

強調されたのは「皇軍伝統の精神威力」

白兵戦中心の 銃剣突撃主義だった

▽物的戦力向上に 何ら

見るべきものがないまま 太平洋戦争に

▽ガダルカナルで 米軍に包囲され自決した
古宮政次郎大佐(歩兵第29連隊)の遺書には

「吾人は火力を軽視すべからず。火力十分なれば
兵の行動は果敢となり、その気力また充実する
も、火力不足すれば消極的ならざるを得ず」

▽参謀には この単純な真理が 最後までわからず

●日露戦争の軍人は、情報にも新知識にも敏感であり、
その吸収にも熱心だった

米内 光政(よない・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て林・近衛・平沼内閣海相となり三国同盟に反対。昭和15年首相。19年に現役に復帰し小磯・鈴木内閣海相。終戦に尽力した

鳴田 繁太郎(なるだ・しげたろう)

明治16(1883)～昭和51(1976)東京生まれ。海軍大将。軍令部次長などを経て東条内閣海相。「東条の副官」と酷評されたほど、東条の言いなり。昭和19年に軍令部総長も兼務したがサイパン陥落で辞任。東京裁判で終身禁固刑、30年釈放

海兵の英語教育を守った井上

井上が海兵校長の時、海軍省教育局が「18年入試から英語を除外してはどうか」。陸軍は15年から士官学校などの入試に外国語を廃止、「このままでは優秀な生徒が海軍に英語があるのを嫌って陸軍に流れてしまう」

井上は「一体どこの海軍に自国語一つしか話せないような海軍将校がいるか。そのような者が世界へ出て、通用するわけがない。秀才が陸軍に流れるなら、流れて構わない」

日本の主力戦車は

九七式中戦車(昭12年翻)は歩兵の援護用に作られたので装甲が27ミリと薄く、ノモンハンでも兵隊が「お豆腐みたい」と嘆いたほど。16年に対戦車戦用として一式中戦車を作ったが、装甲50ミリ、戦車砲の口径47ミリ。しかも生産されたのはたった570台だった。

米軍は70ミリ砲搭載、装甲75ミリのシャーマン戦車を5万台も作っていた。性能もさることながら、数字が1桁でなく2桁違っていた。

秋山好古と真之は

好古は「非力な日本の騎兵が勝てたのはなぜか」と聞かれ、「こっちが最初から機関銃を持っていたのに、向こうが持っていないかったからだ」と明快に答えている。若い頃フランスに留学、機関銃の威力を見抜いて、機動力のある騎兵に持たせるよう意見書を出していたが、フランスから60挺買入れたのは開戦直前。

真之はアメリカに留学している時、イタリアの青年マルコーニ(1874~1937)が嵐の英仏海峡で無線通信に成功したのに注目、ニューヨークにやって来たマルコーニのインタビュー記事を海軍省に送り、艦隊通信に無線を使うよう提案している。130%の通信が出来る無電機を開発したのが明治36年秋、ほとんどの軍艦に配備を完了したのは開戦半月前だった。

マルコーニが無線電信装置を発明(28年)してから10年足らずの間に、日本海軍は艦隊通信に無線を採用、日本海海戦での信濃丸の「敵艦見ユ」の第一報となつた。

秋山 好古(あきやま・よしふる)

安政6(1859)~昭和5(1930)愛媛県生まれ。陸軍大将。騎兵育ての親。日露戦争で習志野の騎兵旅団を率いて、世界最強といわれたコサック騎兵を破る

秋山 真之(あきやま・さねゆき)

明治1(1868)~大正7(1918)愛媛県生まれ。海軍中将。好古の弟。海軍切っての戦術家として知られ、日本海海戦で連合艦隊作戦参謀としてバルチック艦隊を破る。軍務局長のとき急死

伊藤の見事な文民統制

協議会冒頭「もし今日このまま放任したら、ただ単に満州ばかりでなく、中国の人心は日本に反抗するに至るであろう」と前置きして「軍政署を断然廃止し、その地方の行政は清国に一任せねばならぬ」と強調した。

児玉(參議)が「外国の感情はそれほど悪くない。領事が赴任すれば解決するであろう」と反論すると「領事は人民の保護者ではない。帝國商工業の代表者である。人民保護の権は、宜しくこれを清国に譲らなければならぬ」。児玉が満州經營のため拓殖務省のような新組織を提案するに至って伊藤の怒りは爆発した。

「児玉総長は満州における日本の地位を根本的に誤解しているようだ。満州における日本の権利は、講和条約によってロシアから譲り受けた遼東半島と鉄道の他は何もない。満州は決してわが国の属地ではなく、純然たる清国領土の一部である。属地でもない場所にわが主権が行われる道理はないし、拓殖務省のようなものを新設して事務を行わせる必要もない。満州行政の責任は、宜しくこれを清国に負担せしめねばならぬ」

●日露戦争は、形の上で勝ち過ぎてしまった？

△実際は 苦戦の連續

日英同盟(明治35年1月)による 外交の勝利

ロシアの満州独占に反対 門戸開放を約束して

英米の経済的支援を 取り付けた戦いだった

△一等国になった民心が 世界を強国の立場から

日米対立の火種は日露戦争直後から

ポーツマス講和条約では、日露両軍は18か月以内に撤兵することになっていた。日本軍は、この機会に既得権を拡充しようと各地に軍政署を設け、南満州を軍政地域にしようとした。

英米からは伊藤に「満州における日本軍の門戸閉鎖は、ロシアの占領当時より厳しく、もし今まで行けば日本はやがて与国の支持を失うであろう」と、強い懸念を指摘して來た。

△伊藤は39年5月 元老 政府・軍首脳を集め

「満州問題に関する協議会」を開いた

▽軍政署は 領事のいる所は直ちに
その他も 順次 廃止することになった

●日本の分水嶺が、中国に対する「21か条要求」

▽第一次世界大戦(大正3年7月28日)が 始まると
大隈重信内閣は 日英同盟を大義名分に
対独宣戦布告(8月23日) 青島など山東半島を占領
▽中国は 日本軍の即時撤兵を 要求してきた
▽これに対する回答が「21か条要求」(大正4年1月18日)
日本の狙いは 旅順 満鉄の返還期限延長

ロシアから譲り受けた権益は期限付

旅順は25年、大正12年には返さなくてはならない。満鉄も36年経てば、中国は買収交渉できるし
80年で無条件返還。そこで99年延長を要求した。

▽この際だというので

「政治、経済、軍事顧問に日本人を雇え」
「兵器は日本の物を使え」「警察も日中合弁に」

▽「不当な国日本」のイメージを 膨らませた
▽問題の項目は 英米には 秘密にしていたが
米国の新聞にスッパ抜かれ 英米も 強い疑念
▽大隈内閣は それらを外して 最後通牒
▽中国は 受諾した5月9日を「国恥記念日」
反日 排日運動が 中国全土に広がっていった
▽中国侵略者は それまで
イギリス ロシア ドイツ フランスだったのに
代わって 日本だけが 非難の矢面に

●明治の日本は、条約を守る点では優等生の国

— 山本海相は日露開戦で大臣訓示を打電 —

「ワガ軍隊ノ行動ハ常二人道ヲ逸スルガ如キ
コトナク、終始光輝アル文明ノ代表者トシテ
恥ズル所ナキヲ期セラレムコト、本大臣ノ切
ニ望ム所ナリ」

▽「文明」というテーマこそ

条約改正に苦労した 明治のリーダーが
常に 心がけてきたことだった

▽義和団事件で 北京の各国公使館が 包囲された時
籠城戦の指揮をとった 柴五郎中佐(瀬公使館付武官)

大隈 重信(おおくま・しげのぶ)

天保9(1838)～大正11(1922) 佐賀県生まれ。伊藤・黒田内閣外相として条約改正交渉中、爆弾を投げられ右足切断。明治31年憲政党総裁として最初の政党内閣を組織、閣内不一致で4か月で辞職。大正3年第2次内閣を組織し対独宣戦布告、中国に21か条要求を行う。明治15年東京専門学校を創立、40年早大総長

— 「うまい汁」のツケは大きかった —

大戦の後、「火事場泥棒」という日本語が、そのままヨーロッパの辞書に。「強国の油断を見て、うまい汁を吸うこと」と意味が書いてあった。

日本はヨーロッパのような近代戦、総力戦の凄まじさを経験しないまま楽な戦争で、南洋諸島、青島を取り、旅順、満鉄の権利を99年延長した。しかも国内は空前の軍需景気に沸き、日露戦争の莫大な借金もあつという間に返したが…。

— 「安政の五条約」 —

安政5年(1858)米・蘭・露・英・仏との間に結ばれたが、帝国主義時代の悪どさの見本のようなものだった。

第一に、日本の関税は一律5%に抑えられた。明治になり、とうとう流れ込んで来る外国製品に關税を高くしたいと思っても、出来ない。一番低いといわれたイギリスでさえ11%。

第二に、日本にいる外国人が犯罪を犯しても日本には裁判権はなく、外国人はその国の領事が裁判をする治外法権だった。

治外法権撤廃が明治32年、關稅自主権を回復するのは日露戦争が終わって6年も経った44年7月だった。

- ▽日本の賠償金要求は 控えめなものだった
- ▽連合軍 最大の兵力(3万3800人の38%)を送り
一番大きな犠牲(既757人のうち349人)を出しながら
露29% 独20% 仏16% 英11%に対し 日本7.7%
- ▽外交には 信頼の積み重ねが 大きかった

●明治の軍人は、心に武士としての美意識

- ▽最大の激戦場・旅順「水師營の会見」(佐々木信綱作詞)

… 乃木希典(第3軍司令官)は

ステッセル将軍から、降伏の印である剣を取り上げず、サーベルの着用を許した。アメリカの映画技師が会見場面を撮影したいといつても、「敵将を侮辱するものだ」と許さず、従軍記者のたっての願いで承知したのが、会見後、友人として並んだ記念写真、それも1枚だけという条件だった。これは「祖国のために尽くしたステッセルに武士の名誉を与えよ」との、明治天皇の指示でもあった。

… 東郷平八郎(連合艦隊司令長官)は

日本海海戦で重傷を負い、捕虜になったロジェストウェンスキー中将を佐世保の海軍病院に見舞った。「日本では勝敗は兵家の常と申します。祖国のために立派に戦って義務を尽くせば、軍人としての名誉は傷つきません。私は閣下とその将兵が実際に勇敢に戦われたのをこの目で見て、感激しました。閣下のために病院船を1隻用意しておきます。健康を回復され帰国を希望される時は、いつでもご用命下さい」

- ▽東郷は 軍神広瀬武夫中佐が戦死した
旅順口閉塞作戦に「危険が多すぎる」と
簡単には 首を振らなかった
- ▽夜間の作戦とし 沈めに行く船に水雷艇をつけ
隊員収容に 手を打った上で やっと許可
- ▽それでも 17名が捕虜になり 旅順陥落で
解放された時 東郷は 全員に木杯、時計を贈る
- ▽木杯には「勇ましく 仇の港を閉ざしつる
君が勲は 千代も薰らむ」と 東郷自作の歌
- ▽上に立つ者の姿勢が 軍隊の姿勢に

柴 五郎(しば・ごろう)

安政6(1859)～昭和20(1945) 福島県生まれ。陸軍大将。駐英・駐清国武官。第12師団長、台灣軍司令官。敗戦後割腹自決

義和団事件(北満騒)

明治33年(1900)、列強の中国侵略に怒った民衆の排外運動。6月に北京の各国公使館が包囲された時タイムズ特派員モリソン記者が柴中佐の活躍を速報、歐州の新聞には連日「Colonel Shiba」の大見出しが躍った。タイムズは社説で「日本兵ほど男らしく奮闘し、その任務を全うした國民はない。日本兵の輝かしい武勇と戦術が北京籠城を持ちこたえさせた」と絶賛した。

列強諸国は連合軍を編成、北京を解放したが、ロシアなど各國軍隊の掠奪・暴行が横行した中で1万3千の日本軍は規律正しく勇敢だった。英人看護婦は「絶対といつていいほど信頼出来たのは日本兵だけだった」(回憶)。「日本軍の管轄地域なら安全だ」と、大勢の中国人が保護を求めて来た。掠奪を免れるため「家には日本兵がいるぞ」と、軒先に日章旗を掲げた民家もあった。

佐々木 信綱(さき・のぶつな)

明治5(1872)～昭和38(1963) 三重県生まれ。歌人・国文学者。「水師營の会見」、「勇敢なる水兵」など多くの軍歌・唱歌・式典歌を残す。昭和12年文化勲章受章

乃木 希典(のぎ・まれけ)

嘉永2(1849)～大正1(1912) 山口県生まれ。陸軍大将。日露戦争で第3軍司令官旅順攻略を指揮し苦戦。戦後、学習院長となり、昭和天皇の教育に当たる。明治天皇大喪の日、静子夫人と自決

●捕虜になるのは「恥だ」とは思っていたが…

▽一人一人の 心の問題であって

国家が 強制するような思想は なかった

— 日露戦争では約2100人が捕虜に

読売新聞は「大いにロシアにいる捕虜を慰めるべし」との社告を掲載し、慰問品を送る呼びかけをしている。フランス政府を通じて送ったので、社員が総出でフランス語の宛名書きをしたほどたくさんの慰問品が集まったという。

▽流れが変わったのは 上海事変で重傷を負い

捕虜になった 第9師団(鉢)大隊長

空閑昇少佐(くわん・のぼる)が 停戦協定で

送還後に ピストル自決(昭和7年3月28日)してから

「生きて虜囚の辱を受けず」

陸相荒木貞夫は大臣談話を発表して「最高の軍人精神」と位置付け、新聞もまた「捕はれて生き残ったのを深く恥とし」「武士道のため潔く死を選んだ」と報道した。空閑は軍国美談の主人公として映画にもなり、これ以後、日本の軍人には、勝利か死かしかなく、捕虜は許されない風潮が出来上がっていった。

それを決定的にしたのが昭和16年1月8日、東条陸相が全軍に示達した「戦陣訓」。「名を惜しむ」として、「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪積の汚名を残すこと勿れ」

●「陛下の側近に人なしの格好に…」

元老西園寺公望の嘆き —

二・二六事件で高橋是清暗殺を聞いた時、「自分は明治、大正、今上の三陛下にお仕えしてきた。申し上げにくいことだが、考えてみると今の陛下はご不幸な方だ。陛下は一番ご聰明な方だと思うが、残念なことに最近は有力な政治家がみんな殺されてしまい、陛下の側近に人なしの格好になっている」

▽原敬首相暗殺(大正10年)に始まり

浜口雄幸狙撃(昭和5年) 犬養毅(五・一五事件)も

東郷 平八郎(とうごう・へいぱちろう)

弘化4(1847)～昭和9(1934)鹿児島県生まれ。海軍大将・元帥。日本海海戦で連合艦隊長官としてバルチック艦隊を破り国民的英雄に。戦後、軍令部長。国葬

広瀬 武夫(ひろせ・たけお)

明治1(1868)～明治37(1904) 大分県生まれ。海軍中佐。旅順口閉塞作戦に参加し、行方不明の杉野孫七兵曹長を探して戦死した行為が「軍神」と仰がれる

荒木 貞夫(あらき・さだお)

明治10(1877)～昭和41(1966) 東京生まれ。陸軍大将。昭和6年犬養内閣陸相、斎藤内閣にも留任。急進派青年将校「皇道派」の指導的存在になり、「統制派」と対抗。近衛・平沼内閣文相。東京裁判で終身禁固の判決を受けたが29年仮釈放

…「南京事件70年」…

岡本行夫さん(小泉元首相補佐官)は「なんとも憂鬱である」(昭和19年3月2日付読売新聞)。一般公開されるドキュメンタリー映画「南京」では、日本軍の殺戮・強姦の話がこれでもかと続き、「犠牲者は20万人以上」の東京裁判の数字が引用され、靖国神社で軍服姿で万歳を叫ぶ現在の日本人の映像で終わるのだという。

岡本さんは「映画を見たほとんどの人は、日本と日本人が嫌いになるだろう」

— この他にも同様の映画が作られる予定で、南京でいったい何が起こって、何が起らなかったのか。大規模虐殺はあったのか、なかったのか。結論として、「政府は一連の映画を作り出す反日的な心象が世界中の人々にしみ込む前に、自ら検証する決意を披瀝すべきである。その姿勢のみが、『南京事件の規模は中国の主張どおりで、日本はそれにフタをしている』という非難に反論

▽みんな 生涯には 筋金が一本通っており
軍部に 敢然とものを言う 気骨のある人ばかり
原は金に潔癖、公私の別も

「葬式の後で開封すべし」とある遺書には、政治関係の金97万5千円について書いてあった。うち82万5千円は選挙の寄付金の残額で、こうした金があること、その引渡しは誤解を招きやすいから「絶対秘密厳守」を命じ、金のこと非難されるのは終生の心残りだとして、「一銭一厘といえども曖昧不正のものなし」

残りは、鴻池の大番頭原田二郎から預かった通帳の15万円で「原田が来て、君に財産のないのはよく承知している。それでなくとも、老後に金がなくて困るだろう。自分は君に何ら求める所はない。ただ、政治行動に賛成するものだから、是非受け取ってくれ。断っても承知しないので、その好意に対して受け取ったが、死後はこの通帳のまま返還すべし」

高橋「食うに困って役人になったのでは」
特許局長の時、ペルーの銀山開発に日本代表して参加。完全に掘り尽くしたインチキ話で、土地・家屋を処分して会社を整理した。友人が心配して県知事など役人を話を持つて来ても「これまで私が役人をやったのは、衣食のためではない。いつ役人をやめても、差し支えないだけの用意があったからだ。だから、上司が間違っていたら、敢然、これと議論して憚る所がなかった。ところが今は、衣食のために苦労せねばならぬ身になっている。食うに困って役人になったのでは、上司が間違っていても従わなければならぬことがあるかも知れぬ」

岡田啓介首相から6度目の蔵相就任を要請された時は81歳。「これがもっと年が若くて先へいってご奉公できるというなら別だが、わしはもうこの年で先はない。いま奉公しなければ奉公する時はない」。「非常時」を叫ぶ軍部に「軍部が勝手に非常時を作つて国民を扇動しているのだ。こっちの方がよっぽど非常時だ」

する道になる。そうした上で初めて、意図的な反日キャンペーンに対抗する道も開けてくる。今の日本人の名誉を守るのは政府の責務である」

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。公爵。文相、枢密院議長を歴任し、明治36年政友会総裁。39、44年首相。大正末から最後の元老として後継首相奏請

原 敬(はら・たかし)

安政3(1856)～大正10(1921) 岩手県生まれ。通信相、内相を経て、大正2年政友会総裁。7年に首相となり初の本格的な政党内閣を組織、「平民宰相」として世論の支持を受ける。西下の途中、東京駅で大塚駅員中岡良一に暗殺される

浜口 雄幸(はまぐち・おさち)

明治3(1870)～昭和6(1931) 高知県生まれ。蔵相、内相を歴任、昭和2年民政党初代総裁。4年首相に就任、金解禁を断行、ロンドン海軍軍縮条約に調印。「統帥権干犯」と攻撃され、東京駅で右翼の青年佐郷屋留雄に狙撃される

犬養 育(いぬかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932) 岡山県生まれ。号は木堂。文相、通信相を歴任。念願の普通選挙法成立を機に政界引退を表明したものの、昭和4年政友会総裁となり6年首相。満州事変後の政局に対処したが、五・一五事件で射殺される

原田 二郎(はらだ・じろう)

嘉永2(1849)～昭和5(1930) 三重県生まれ。鴻池銀行理事となり、同家の改革に当たる。大正9年私財を投じて原田積善会を設立、社会事業に貢献した

海軍軍縮条約に命を賭けた浜口

ロンドン会議が軍令部、野党政友会の反対で難航した時、山梨勝之進(鰐吹)を呼んで「これは自分が政権を失うとも、民政党を失うとも、また自分の身命を失うとも、奪うべからざる堅き決意なり」。風貌と獅子が吠えるような演説から「ライオン宰相」の異名をとったが、決して能弁ではなく、山梨は「ただ少ない口数の一言一言に、心に染み入る響きがあった」

「問答無用」は言論の完全な否定

犬養は五・一五事件で襲撃された時、「話せばわかる」と一同を制したが「問答無用、撃て」の一声で射殺された。満州事変以後の日本は、なだれを打って右側に移動している時。「動機は純粹だ」、「愛国の至情に出たものだ」と減刑運動が展開され主犯将校2人が禁固15年、士官候補生も禁固4年。しかも荒木陸相談話は、「純真なるこれら青年がかくの如き挙措に出でたる心情を考えれば、涙なきを得ない。真にこれが皇国のためにになると信じて行なつたことであるが故に、この事件を契機に再思三省、以て被告の心事を無にせざらんことを切望する」

●昭和への流れを見れば、大正11年が節目の年

△ワシントン会議で 主力艦の比率を「5・5・3」

米英に対し 日本は6割の軍縮条約に調印

全権加藤友三郎海相のメモ

「国防は軍人の専有物に非ず。戦争もまた軍人のみにてなしうべきものに非ず。国家総動員してこれに当らざれば、目的達しがたし。故に一方においては、軍備を整うると同時に、民間工業力を発達せしめ、貿易を奨励し、眞に国力を充実するに非ずんば、いかに軍備の充実あるも、活用する能わず。平たくいえば、金がなければ戦争ができるぬということなり。もし今回の軍縮がなく、これまで通り建艦競争を続けていたら、どうなるだろう。アメリカは必要と感じたら、どこまでもやり抜く実力を持っている。そうなれば、日米間

岡田 啓介(おかだ・けいすけ)

明治1(1868)～昭和27(1952) 福井県生まれ。海軍大将。首相の時、二・二六事件で襲撃され九死に一生を得る。東條内閣倒閣に重臣を結束させ、総辞職に

山梨 勝之進(やまなし・かつのしん)

明治10(1877)～昭和42(1967) 宮城県生まれ。海軍大将。昭和3年海軍次官、ロンドン軍縮条約締結に尽力。14年に学習院長となり、今の天皇の教育に当たる

… 井上成美(北齋)は部下を戒めた …

「軍人は平素でも軍刀を帯びるのを許されており、我々もその服装を誇りとしている。それは一朝事ある時、その武器で敵を斬り國を護るという極めて國家的な職分を果たすらだ。一朝事があるかどうかは、國家の意志が決定する。武器を持っているからといって勝手に殺傷すれば、軍人もただの人殺しだ」

加藤 友三郎(かとう・ともさぶろう)

文久1(1861)～大正12(1923) 広島県生まれ。海軍大将。日本海海戦の時の連合艦隊参謀長。大隈・寺内・原・高橋内閣海相を務め、ワシントン軍縮条約締結。大正11年首相となり陸軍軍縮も実施した

「中国に関する九か国条約」

日本では、海軍軍縮条約に目を奪われ、それほど問題にならなかつたが、中国の主権を尊重し領土を保全すると共に、中国の門戸開放、機会均等を図る条約に、日本など会議参加の9か国が調印している。

このため、満州事変でも支那事変でも日本は「条約違反だ」と非難されることになる。

の海軍力の差は益々開くばかりで接近することはない。この軍備制限が実現しない場合を想像すれば、むしろ十・十・六で我慢する方が結果的には得策だ」 加藤の大人の見識だった。

●「陸軍の大御所」山県の死(大正11年2月)と共に陸大閥

- ▽きっかけは「バーデン・バーデン(離)の密約」
- ▽「陸士16期の三羽鳥」永田鉄山 小畠敏四郎
岡村寧次の3少佐が集まつた(大正10年10月)
- ▽大戦後のヨーロッパを見て
「陸軍近代化には陸軍を改革しなければ駄目だ」
- ▽「長州閥打破」を申し合わせ
ライプチッヒ留学中の東条(17期)も参加
帰国して国策研究会「二葉会」を結成

●昭和4年5月、「二葉会」は「一夕会」(いっせきかい)に

- ▽会員42人を擁する大政策集団

大きな特徴があった

- ①全員が陸大を優秀な成績で卒業した者
- ②幼年学校出身者で固めたこと。中学出身は3人だけ、陸大閥は幼年学校閥だった
- ③陸軍省、参謀本部、教育総監部と、中央勤務のエリート将校ばかり
- ④長州が1人もいないこと

- ▽関東軍参謀石原莞爾中佐が柳条湖で満鉄を爆破

満州事変(昭和6年9月18日)が成功したのも

陸軍中央の課長クラスを占めていた

「一夕会」のメンバーが

がっちりスクラムを組んで応援したから

- ▽「一夕会」は永田・小畠の主導権争いから分裂し

統制派・皇道派の対立となり二・二六事件へ

- ▽陸軍部内に下剋上の風潮を生み

中堅幹部が陸軍だけでなく国策をも動かす

●幼年学校閥の弊害が出てきた

- ▽陸大卒業生の成績優秀な1割ほどが

諸外国に派遣されるがドイツが144人

フランス85人ソ連76人に対し

イギリス55人アメリカに至っては44人

永田 鉄山(ながた・てざん)

明治17(1884)～昭和10(1935)長野県生まれ。陸軍中将。昭和9年軍務局長就任、総動員体制の基礎を作る。統制派の中心と目され、白昼、局長室で皇道派将校に斬殺される。二・二六事件の前奏曲

小畠 敏四郎(お畠・としじろう)

明治18(1885)～昭和22(1947)高知県生まれ。陸軍中将。参謀本部第3部長、陸大校長。皇道派として二・二六事件後の肅軍で予備役。戦後、東久邇内閣国務相

岡村 寧次(おかむら・やすじ)

明治17(1884)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。第11軍司令官を経て昭和19年支那派遣軍総司令官

…陸大から長州を締め出す…

相次いで陸大教官になった彼らは、一次の筆記試験で良い成績でも長州だと二次の教官面接で悪い点をつけ落とした。大正11年から昭和8年まで11年間、陸大卒業生に長州はいない。

石原 莞爾(いしはら・かんじ)

明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。ドイツ駐在を経て昭和3年関東軍参謀となり、満州武力占領のため柳条湖で満鉄を爆破し満州事変を起こす。参謀本部作戦部長の時、支那事変拡大に反対するが失敗。東条と対立、予備役に。東亜連盟を指導した

幼年学校の語学

フランス語、ドイツ語、ロシア語。明治陸軍が最初はフランス式を採用、それがドイツ式に代わりロシアは常に仮想敵国だった。英米は海軍国、英語は中学出で十分と考えた。

△陸軍大将134人のうち 米国駐在経験は4人
△いざ アメリカと戦うとなった時
　アメリカのことをよく知っている者が
　陸軍中枢にほとんどいないという結果に

●いかにアメリカを知らず、また甘く見ていたか
△開戦時51個師団のうち

　南方作戦に向けたのは11個師団40万人
　陸軍の目はソ連に向かっていた

　参謀本部は陸軍のマレー半島上陸作戦、海軍の真珠湾攻撃が成功すると、開戦10日後、12月18日には「南方が一段落したら、南方兵力を20万に半減し、17年夏を目指して、関東軍の対ソ作戦準備を極力促進する」—— 対ソ戦準備の戦争指導方針を決めている。

「この戦争は飛行機で決まる」

　陸海軍首脳部が、このことを完全に認識したのも18年、それもかなり遅くなつてから。開戦劈頭、機動部隊で真珠湾を攻撃して「飛行機の時代」の扉を開いておきながら、軍令部は相変わらず「戦いの最後を決めるのは艦隊決戦だと、大艦巨砲主義に取り憑かれていた。

　アメリカは逆に、これを教訓に戦艦の建造をやめて空母主体に切り替え、パイロットの大規模養成に乗り出した。

●無謀な戦争を、食い止めることは出来なかつたのか
△最初のチャンスが

　二・二六事件直後の 広田弘毅内閣

△不祥事を起こした陸軍に 肃軍を徹底させ

　政治介入をやめさせ 立憲政治の秩序を確立

△陸軍は 大将10人中7人を予備役 形だけ肅軍

△広田内閣外相に吉田茂 国務相に下村宏など

　閣僚候補が決まると 陸相予定の寺内寿一が

　入閣辞退を申し入れて來た

△「広田内閣は依然として自由主義的色彩を帯びている。積極政策によって国政を一新することは、全軍の要望である」 声明を記者団に発表

井本熊雄大佐の話

「およそこのくらい、相手国の実情を知らずに戦争に突入した例は、世界戦史上稀ではないか」

井本 熊雄(いもと・くまお)

明治36(1903)～平成12(2000)山口県生まれ。陸軍大佐。参謀本部作戦課員、陸相秘書官、第2総軍作戦課長歴任。戦後、陸上自衛隊に入り陸将、幹部学校長

… 対米戦対応も遅れた ……

ガダルカナルで敗退(18年2月戻)し主戦場は南方ジャングル地帯になっているのに、内地部隊は専らシベリアを想定しての極寒訓練をしていた。陸軍が「ア号教育」— 戰闘方法を対米戦主体に切り替えるよう指令を出したのは、18年8月だった。

年末、陸大の卒業式に臨まれた昭和天皇は、お付きの侍従武官長に「対米戦苛烈な今日、対ソ戦教育ばかりをしているのはなぜか」。参謀将校を養成する陸軍の最高教育機関が天皇に注意されて、対ソ戦教育を対米戦教育に改めたのは、もう戦局がどうにもならなくなつた19年になって。

広田 弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。欧米局長、駐ソ大使、斎藤・岡田内閣外相。昭和11年首相に就任、軍部大臣現役制を復活、日独防共協定に調印。第1次近衛内閣で再び外相。終戦時はマリク大使と、ソ連仲介和平工作に当たる。東京裁判で文官中ただ1人絞首刑に

下村 宏(しもむら・ひろし)

明治8(1875)～昭和32(1957)和歌山県生まれ。台湾総督府総務長官、朝日新聞副社長、日本放送協会会長を歴任。鈴木内閣国務相として終戦に尽力

▽武藤章中佐(軍事課高級課員)が 組閣本部に乗り込み
「吉田は重臣牧野伸頸の娘婿だからいかん。自由主義の急先鋒である朝日の下村の入閣反対」

▽広田は「肅軍第一の時に何事か」と
怒鳴りつけるべきだったが 要求を全部呑んだ

猪木正道さん(政治学者、防衛大校長)は――

「広田に残された途はただ一つしかない。すなわち昭和天皇に拝謁して『陸軍の横槍により、思うように組閣はできません。大命を拝辞するよりほかなくなりました』と率直に申し上げることである。広田がもし率直に昭和天皇に窮状を上奏すれば、天皇は二・二六事件における毅然たる御態度と明快な御判断から見て、ただちに寺内大将を呼んで厳しく叱責されたはずである。そこに日本の唯一の活路はあった。昭和天皇は広田からの正直な上奏がなければ、陸相候補者を直接叱るわけにはいかない」(「軽日本の興亡」)

寺内 寿一(てらうち・ひさゆき)

明治12(1879)～昭和21(1946)山口県生まれ。陸軍大将・元帥。正毅元帥の長男。広田内閣陸相、北支那方面軍司令官。太平洋戦争では南方軍総司令官となり敗戦後シンガポールで病死

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948)熊本県生まれ。陸軍中将。昭和14年軍務局長となり三国同盟推進。敗戦時、比島の第14方面軍参謀長。東京裁判で絞首刑に

牧野 伸頸(まきの・のぶあき)

文久1(1861)～昭和24(1949)鹿児島県生まれ。大久保利通の次男、吉田茂の岳父。文相、農商務相、外相を歴任、宮内大臣を経て大正14年から15年間、内大臣

●ひとたび膝を屈した広田内閣は、陸軍の傀儡政権に

▽昭和11年5月 「軍部大臣現役制」を

22年ぶりに復活 陸軍に「内閣生殺与奪の権」

▽11月には 日独防共協定に調印

日独伊三国同盟への道を開いてしまった

在外大使でただ一人反対した吉田茂――

陸軍省から駐英武官辰巳栄一中佐(めいしやう)に、「吉田を説得せよ」との訓令が来た。吉田は「軍部はナチスの実力を買い被り過ぎている。英米は広大な領土、豊富な資源を持っている。この際何も日本が飛び込んでドイツにつく必要はないじゃないか。どちらかにつくなら、自分は寧ろ英米側を選ぶ。これが日本の将来のためにとるべき道だと信じている。ヒットラーの無軌道なやり方を見ていると、きっと歐州に戦乱が起こる。この戦争が拡大した場合、日本が巻き込まれる恐れがある」

辰巳は「この時すでに第二次大戦、ひいては日本の参戦を予見した吉田さんの鋭い勘には全く敬服のほかはない」

… 軍部大臣現役武官制 ……

「陸海軍大臣は現役の大将、中将に限る」――この現役という2文字がどんな威力を持っていたか。「この内閣では現役将官でなり手がない」と言われてしまえば、内閣は即日崩壊するしかない。山本権兵内閣が大正2年に現役制を廃止し、大将、中将さえあれば現役を退いた軍人でも軍部大臣になれるようになっていたのに…。

近衛 文麿(こんゑ・ふみろう)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和12年首相となり直後の支那事変収拾に失敗。枢密院議長を経て、15年に第2次内閣を組織すると、日独伊三国同盟を締結、南進政策を確立した。第3次内閣で日米交渉に努めたが、東条陸相の主戦論の前に総辞職。戦後、東久邇内閣国務相。GHQから12月、戦犯出頭命令を受け服毒自殺した

●第二のチャンスが 蘆溝橋事件

- ▽局地解決していたら 太平洋戦争はなかったろう
- ▽高松宮(当时32歳 海軍少佐)の日記に
　　事件を発生させ 泥沼化させた要因
- ▽問題は どちらが先に 発砲したかではなく
　　日本が どのように 処理しようとしたかだった
- ▽近衛首相に リーダーシップがないこと
　　外相になっていた広田の 消極的姿勢に不満
- ▽近衛内閣は 深い考慮 検討を加えることもなく
　　拡大派に引きずられる形で 中国大陸の奥深く

●支那事変の全期間を通じて、繰り返し和平の試み

- ▽ことごとく 失敗したのは
　　「あと一押し」と 戰線を拡大していったから
- ▽日本の要求は 軍事行動につられて過大に
- ▽惜しかった トロウトマン(ドイツの顧問)工作
 - ・華北非武装地帯設定 親日的な行政長官任命
 - ・上海非武装地帯設定 ・反日政策の廃止
 - ・共同防共 ・日本製品への関税引き下げ
- ▽7項目の和平条件を トロウトマンを通じ提示
- ▽蒋介石は 12月7日
　　「和平を討議する基礎として受け入れる」
- ▽すでに 南京攻略命令が出ていて
　　日本側の態度は 変わっていた
- ▽南京を占領(13日)すると 戰勝気分いっぱい
　　陸軍からは 賠償金など 新たな要求も
- ▽大本営政府連絡会議(13年1月15日)は 激論に
　　「交渉引き延ばしだ」と 打切りを主張する
　　政府 陸軍省に対し 参謀次長多田駿中将は
　　「条件を緩和しても、あくまで交渉を継続し
　　和平に導くべきだ」と 譲らず

「軍配は近衛が握っていた」

佐藤賢了中佐(軍務局政策班長)は、「責任は近衛にある」と言っている。「陸軍が一致して打切りを唱えて政府に迫ったのなら別だが、用兵の主である参謀本部が継続を唱え、陸軍は真っ二つに割っていたのだ。もし近衛が、どうしても和平をしなければと思うなら、その軍配を参謀本部に揚げさえすればよかったのだ」

… 蘆溝橋事件

昭和12年7月7日、北京郊外蘆溝橋で陸軍1個中隊が夜間演習中、突然18発ほど発砲された。日本軍か支那軍か、あるいは共産軍か—真相は謎のままだが、現地では間もなく停戦協定、近衛文麿内閣も「現地解決・不拡大」の方針だった。ところが、現地でトラブルが続くと、内地から3個師団派遣を決定し、28日からの総攻撃で北京・天津地区を占領してしまった。

高松宮宣仁親王(たかまつのみや・のぶひと)

明治38(1905)～昭和62(1987)大正天皇の第3皇子。海軍少将。軍令部参謀、砲術学校教頭。海兵在学中(大正10年)から書き続けた「高松宮日記」(全8巻)が、喜久子妃殿下の英断で平成7年に出版される

高松宮日記

(7月14日)…発砲ハ支那ガ先キカシラネド、発砲セシムル如キ演習ヲナスコトニモ十二分ノ欠点アリ。或ハ支那兵営ニ突撃ノ教練?ヲナシタリ、或ハ内地ト同様ニ而モ現地ニテ演習スルハ不謹慎ナリ。…現地ニテ停戦解決セントスレバ、中央ニテ大ゲサニスル。…宜シク外交官ヲシテ、外交ナサシム(ル)モ、戦略ニアラザルカト反問シタキバカリナリ。チナミニ、今度モ外交官ガ自棄的ニ消極的ナリ。此ノ際改メルニヨキ機会ナレバ、軍ハ対勢ヲトリ、外交官ヲシテ十分ナル活動ヲナサシメ、…外交一元化ノ実績ヲアグルヤウ、軍肅ノタメニモ計画スペキナリ。

(16日)…近衛がすつかり軍部にオブサツてしまつてゐる感じなり。

▽近衛内閣は16日 交渉中止を通告
「爾後国民政府ヲ対手トセズ」政府声明を発表

●太平洋戦争に突入する運命を決定的にしたのが日独伊三国同盟(15年9月)、引き返すことのできないものにしたのが南部仏印進駐(16年7月) — 第2次近衛内閣

▽陸軍が 三国同盟締結に 跳起になっている時

独ソ不可侵条約(14年8月)の 激震に襲われた

▽日独防共協定は 全く 無意味なものになり
「相互の同意なくして、ソ連との間に一切の

政治協定を結ばない」(翻訳)に 反する裏切り

▽平沼騏一郎内閣は「欧州の天地は複雑怪奇」

声明を出して総辞職したが「約束と違う」と
ドイツと袂を分かつ 絶好の機会だった

▽陸軍のドイツ頼みは

味方に 少々裏切られても 変わらなかった

●第二次大戦(14年9月)が始まりドイツ軍の電撃作戦(15年4月)で、日本中は「バスに乗り遅れるな」の大合唱

▽フランスが降伏(6月)すると 世界の目は

ドイツが いつ英本土上陸作戦を 決行するか

▽陸軍の判断は「大英帝国の崩壊は決定的だ」

▽目の前に開けてきたのが 英仏蘭が

東南アジアに持っている 広大な植民地

主を失って 空白になれば

日本のはしい重要資源 石油 ゴムが山ほど

— 南進論、三国同盟論が軍部の大勢に —

「千載一遇の好機だ。今こそドイツと提携し、
東南アジアに進出して慢性的な物資不足を一
気に解決すべきだ」。海相時代から一貫して三
国同盟に反対している米内内閣では駄目だと
近衛待望論が強くなった。畠俊六陸相が辞表
提出、陸軍が後任を送らないことは明らかで、
米内内閣は総辞職。7月22日第2次近衛内閣に。

●9月5日に北部仏印進駐、27日には三国同盟

▽特異なのは 交渉がほとんど

松岡洋右外相一人で 進められ

調印まで 20日足らずのスピード調印

佐藤 賢了(さとう・けんりょう)

明治28(1895)～昭和50(1975)石川県生
まれ。陸軍中将。軍務課長を経て昭和17
年局長。東京裁判で終身刑、31年出所

… 西園寺は目をむいて怒った ……

「大きな失策だ。日清戦争にしても、
李鴻章(淸國の勲者)をつかまえたから
こそ、話が出来たのだ。相手にしつか
りした者をつかまして、それと話を
つけるこが定石ではないか」

平沼 駿一郎(ひらぬま・きゆういちろう)

慶應3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生
まれ。検事総長、大審院長、法相を歴任、
枢密院議長を経て昭和14年首相。20年、
再び枢密院議長。東京裁判で終身刑を
宣告され、27年病氣で仮出所後に死去

— 情報がなかったわけではない —

辰巳駐英武官は「イギリスは米の支
援で危機を脱し航空戦もイギリス優
位に向かっている」。スウェーデン駐
在武官小野寺信(のち帰)も「ドイツは
イギリス進攻に必要な上陸用舟艇の
準備が出来ていない」。的確な報告を
したが、参謀本部情報部長は、ドイツ
に不利な情報は手元で握り潰した。

畠 俊六(はたけ・しゅんろく)

明治12(1879)～昭和37(1962)福島県生
まれ。陸軍大将・元帥。阿部・米内内閣陸
相を経て支那派遣軍総司令官、第2総軍
司令官。東京裁判で終身刑、29年仮釈放

松岡 洋右(まつおか・ようすけ)

明治13(1880)～昭和21(1946)山口県生
まれ。駐華総領事で退官、満鉄副総裁を
経て昭和5年衆院議員。「満蒙生命線」を
唱え、7年国際連盟臨時総会首席全権と
なり、満州国否認決議に抗議し退場。15
年近衛内閣外相に就任、三国同盟、日ソ
中立条約調印。戦犯容疑で拘禁中病死

ヒットラーの魂胆

スターマー特使を急派して来ると、吉田茂は近衛に「おかしいぞ。向こうに弱点があるから交渉を急いでいるんだ。この事実こそ、ドイツが勝利に動搖している証拠だ」と注意した。

ヒットラーは国防軍首脳を集めて(7月31日)対ソ戦の決意を明らかにした。対英戦長期化で戦争に欠かせないのが石油。まずルーマニア、次にコーカサスの石油を狙ってソ連を崩壊させる。そうすれば英も戦意を失うだろうが、問題は米の出方。米議会は7月に艦船700隻、航空機2万5千機の大軍備拡張案を可決、日本に米参戦を牽制させるため三国同盟を急いだ。

松岡外交の誤算

ドイツ勝利だけでなく、独ソ不可侵条約により独ソ間の親密な関係は続くだらう — この錯覚を前提として、三国同盟にソ連を加え、四国の強大な力で米英に対抗する。そうすれば、米も簡単には対日戦に踏み切れないだろうし支那事変も解決出来るだろう。

しかもスターマーが、「正直な仲買人」という言葉を使って、日ソ国交調整を約束したから、松岡は「我が事成れり」の思いだった。

●国際情勢は激動していた

△ヒットラーは ソ連攻撃命令(15年12月18日)

松岡の方は そんなことは 夢にも知らずに
訪独の帰途 日ソ中立条約に調印(16年4月13日)

△野村吉三郎駐米大使と ハル国務長官の間で
日米交渉が始まり 4月18日

交渉の基礎となる「日米諒解案」が入電

△大島浩駐独大使からは その日

「独ソ緊迫」を告げる 極秘電報

△松岡は 知らぬ間に進められた日米交渉に
躊躇を曲げ 大本営政府連絡会議でも

野村電報の検討はせず 訪欧の自慢話ばかり

△戦争回避には まず 交渉のテーブルにつく
外交に必要な タイミングを失うこと

病床の西園寺は嘆いたが…

三国同盟締結で女中頭に「これで日本は滅びるのや。お前さんたちも、畠の上で死ねないようになつた」

しかし日本国内の空気は、朝日新聞が「今ぞなれり『歴史の誓』めぐる酒盃 万歳の怒濤」と書いたように何か強力な味方を得た感じで、歓迎一色。

野村 吉三郎(のむら・きちさぶろう)

明治10(1877)～昭和39(1964)和歌山県生まれ。海軍大将。第3艦隊長官の昭和7年、天長節の爆弾事件で片目を失う。學習院長、阿部内閣外相。15年駐米大使となり日米交渉に当たる。29年参院議員

大島 浩(おおしま・ひろし)

明治19(1886)～昭和50(1975)岐阜県生まれ。陸軍中将。昭和9年駐独武官、13年大使となり、日独防共協定、三国同盟と枢軸外交を推進した。東京裁判で終身刑を宣告されたが、30年出獄

…問題点の多かった日米交渉…

始まりは、日米民間人同士の話し合い。「日米諒解案」も、双方それぞれ都合のいいことを並べたものだった。ハルは交渉開始の前提として、「ハル四原則」、あらゆる国家の領土保全と主権尊重、内政不干渉、機会均等、和平手段によらない限り太平洋の現状を変更しない — を提示していたのに、野村は報告していなかった。

連絡会議は松岡の独り舞台

駐独武官から「独ソ戦必至」の電報が入ってきたが、松岡は「対米交渉妥結は三分の公算しかない、シンガポールを攻略すべし」と気炎をあげ、種村佐公大佐(駿輔)は「大本営機密日誌」に「近來松岡外相のいうことなし」と、常軌を逸しているようである」

● 6月22日、独ソ戦が勃発した

大本営機密日誌

「この日遂に独ソ開戦す。さきに独ソ間に不可侵条約が結ばれてこれに驚愕した日本国民は、今までこの両者の開戦に接し、歴史の変転に感無量なるものがある。一方とは三国同盟、片一方とは中立条約を結んでいる日本は、一体どうしたらいいのか。第二課(機)航空班長である畏友久門文中佐は、ドイツはここに三国条約に違反した、日本は直ちに三国条約を破棄して中立を堅持せよ、と叫ぶ」

▽松岡構想の破綻 味方にするつもりのソ連を
米英側に追いやる「枢軸国対連合国」
第二次大戦の 戰略的構図が この時出来上がる

●連日の連絡会議では、三国同盟離脱問題には全く触れることもなく、北進か南進かをめぐって論議

▽7月2日の御前会議で「帝国国策」

「自存自衛の基礎を確定する為南方進出の歩を
進め又情勢の推移に応じ北方問題を解決す」

▽近衛は手記に

「多少代償的な意味で南部仏印進駐を認めた」
対ソ戦の火の粉を 追い払うのに懸命で

南部仏印進駐の深刻な影響は 軽く考えた

▽陸軍は「関特演」(關東軍特種演習)で 80万人動員

23日には 第25軍に 南部仏印進駐命令

近衛に反対した幣原喜重郎

「それは絶対にいけない。船を台湾かどこかに
戻して、そこに待機させることは出来ませんか」
近衛は「御前会議で議論を尽くして決定したことだから今更翻すことは出来ない」幣原が「それ
なら私は、あなたに断言します。これは大きな戦
争になります」近衛は「しばらく駐兵するだけ
戦争ではない。それではいけませんか」

▽アメリカは 事実上の「経済断交」で 臨んできた

25日 在米日本資産を凍結

南部仏印進駐を開始(28日)すると

8月1日には 対日石油の全面的輸出禁止

種村 佐公(たねむら・さこう)

明治37(1904)～昭和41(1966)三重県生まれ。陸軍大佐。昭和14年参謀本部作戦課戦争指導班員、19年7月班長となり20年8月第17方面軍参謀。シベリア抑留を経て25年帰国。戦争指導班は「機密戦争日誌」を記録したが、種村はそれを基に「大本営機密日誌」を遺している

「独ソ開戦に伴う帝国国策要領」

一、支那に対しては新たに重慶政権に対する交戦権を発動し敵性租界を接収す

二、南方に対しては仏印及泰に対する諸方策南部仏印進駐を完遂南方進出の態勢を強化す。之が為対英米戦も辞せず

三、北方に対しては密かに対ソ武力的戦備を整え独ソ戦の推移帝国の為有利に展開せば武力を行使して北方問題を解決し北辺の安定を確保す

四、米国の参戦したる場合は帝国は三国条約に基き行動す。但し武力行使の時機及方法は自主的に定む

幣原 喜重郎(じへら・きじゅうろう)

明治5(1872)～昭和26(1951) 大阪生まれ。駐米大使、加藤・若槻・浜口内閣外相として国際協調外交を推進。戦後、昭和20年に首相。吉田内閣副総理、進歩党総裁を経て24年から死去まで衆院議長

機密戦争日誌

戦争指導班は、在米資産凍結にも26日の日誌に「全面禁輸とは見ず。米はせざるべし」と、楽観論を書いていたが、石油禁輸で欄外に朱筆で「本件の判断は誤算なり。参謀本部亦然り、陸軍省も亦然り」と書き入れた。

●日米開戦は、実質的には9月6日の御前会議で決定

帝国国策遂行要領

- 一、帝国は自存自衛を全うする為対米英蘭戦争を辞せざる決意の下に概ね十月下旬を目途とし戦争準備を完整す
- 一、帝国は右に並行して米英に対し外交の手段を尽して帝国の要求貫徹に努む
- 一、日米交渉に依り十月上旬頃に至るも尚我要求を貫徹し得る目途なき場合に於ては直ちに対米英蘭開戦を決意す

▽外交交渉にタイムリミット 初めて開戦決意

昭和天皇は極めて異例なことに

明治天皇の御製「よもの海 みなはらからと思ふ世に など波風の立ち騒ぐらむ」を読み上げられ「自分は常にこの御製を拝誦して、故大帝の平和愛好のご精神を受け継いでいこうと努めているものである」と付け加えられた。天皇の意思は「戦争をせず外交交渉をせよ」

▽東条陸相は 陸軍省に戻るなり 大声で

「聖慮は平和にあらせられるぞ」と 叫んだ

▽近衛首相は なぜ すぐ反応しなかったのか

▽その場で「政府の責任で議案を練り直すため、今

日はこれを取り下げます」と 言わなかつたのか

▽戦争準備態勢を 一度 ご破算にさせる

絶好のチャンスだったが 近衛は「外交交渉続行にいい追い風」くらいに考え みすみす逃した

●近衛内閣は戦争決意の御前会議決定に縛られ総辞職

▽内大臣木戸幸一は 重臣会議で「陸軍を抑えるには この際寧ろ陛下の思召しに忠実な東条が適任」

▽10月17日 東条陸相に 大命降下

その際「白紙還元の御諭」を 伝える

▽東条首相は 初閣議の後

11項目の検討項目を指示 国策の再検討に

国力判断が最後のチャンス

日本は、アメリカから石油の90%、銅の93%、鉄鋼の50%を輸入、米国こそが日本の動脈。この現実を直視すれば、日本の選択肢は「臥薪嘗胆」

なぜ聖断を仰がなかったのか

鈴木貫太郎(終戦時の首相)は「なぜ総理は陛下のご裁断を仰ぐことをせず、みすみす暴挙とわかっている戦争に突入せしめたのか。もしあの時、総理が死を決してご裁断を仰いだならば、太平洋戦争は起こっていなかつかも知れない」

天皇も戦後、藤田尚徳(侍従長)に「残念ながら、戦争を始める前に、近衛にはこの着想はなかったね」と言われた。

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶應3(1867)～昭和23(1948) 大阪生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和4年侍従長。二・二六事件で瀕死の重傷。20年4月首相に就任、聖断で終戦に導く

藤田 尚徳(ふじた・ひのり)

明治13(1880)～昭和45(1970) 東京生まれ。海軍大将、艦政本部長を経て昭和19年侍従長。著に「侍従長の回想」

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977) 東京生まれ。公爵。内大臣秘書官長、文相、厚相を経て昭和15年内大臣。終戦に尽力した。東京裁判で終身禁固刑を受けたが30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

「白紙還元の御諭」

「九月六日の御前会議決定に囚わることなく、内外の情勢をさらに広く深く考究を加うることを要すとの思召しであります」

機密戦争日誌

「如何なることありと雖も新内閣は開戦内閣ならざるべからず。開戦、開戦、これ以上に陸軍の進むべき道なし」

胆」しかなかったはずだった。木戸のミスは白紙還元を東条に伝えただけで統帥部には伝えなかつたこと。開戦決意を変えていなかつた。

しかも説明資料を作成するのは、戦争をやりたがっている作戦当局。どうしても「戦争遂行は可能」と楽観的見通しを並べることになる。作戦上のこととは一切秘密で仮定の上に立って検討することになり、それも軍部から「大丈夫だ」と言われてしまえば、沈黙するしかない。

● 1月5日の御前会議は、戦争決意の国策を可決

一 帝国国策遂行要領(略)

帝国は現下の危局を開いて自存自衛を完了し大東亜の新秩序を建設する為此の際対米英蘭戦争を決意し左記措置を探る

一、武力発動の時機を十二月初頭と定め陸海軍は作戦準備を完成す

一、対米交渉が十二月一日迄成功せば武力発動を中止す

△アメリカから「ハル・ノート」開戦へ

吉田茂は東郷外相に交渉継続を勧めたが

「最後通牒なんかじゃないよ。どこにも交渉打ち切りとは書いてないじゃないか。ハル・ノートを以て交渉をこのまま続ける。連絡会議で聞き入れられなかつたら、構わんから辞表を出せ。君が外相を辞職すれば、閣議は頓挫する。君は殺されるかも知れん。それで殺されたって、男子の本懐というべきだ。骨は俺が拾ってやる」

△真珠湾攻撃の当日 猛吹雪の中

ドイツ軍の悲惨な退却が始まっていた

△もう少し自制していたら

ドイツの限界も見え「開戦不能」の判断に？

● 戦争をしていなかつたら、今日の日本はあつたか

△ 残念ながら 答えは「ノー」

軍国主義の崩壊は B29の空襲 原爆

ソ連参戦の物理的破壊があつて初めて可能

福留繁(海軍作戦部長)は重大な発言

陸海軍局長会議(10月6日)で、「南方作戦に自信なし。船舶の損耗につき、戦争第1年度は140万トン撃沈され連合艦隊の新たな圖上演習の結果、戦争第3年には民需用船舶皆無となる」

船がなければ、いくら蘭印油田地帯を占領しても、日本に運ぶ手段がない。日本の根本的敗因の一つに、沈没1200隻、使用不能2500隻の甚大な船舶被害があった。南方の石油は1730万トン採掘したものの、内地に持つて来られたのは550万トン。20年にはついにゼロに。再検討会議で海軍が出した数字は「戦争第1年70万トン、2年60万トン、3年40万トン」。たった半月で楽観的見通しにすり替えられた。

福留 繁(ふくどめ・しげる)

明治31(1898)～昭和46(1971)鳥取県生まれ。海軍中将。開戦時の軍令部作戦部長。連合艦隊参謀長、第2航空艦隊長官

東条を評して

石原莞爾は「上等兵程度の頭」、近衛は「大きな事のわからない人だが、局長の仕事をさせたら名局長だろう」

「ハル・ノート」

中国、仏印からの全面撤兵を要求し中国では蒋介石以外の政権を支持しない確約、つまり汪兆銘政権の否認。

米国憲法では、開戦の権限は大統領ではなく議会が握っている。議会、国民に開戦を納得させるにはもう一つの道ードイツと同盟している日本から先に手を出させる必要があった。

よく「アメリカから仕掛けられた戦争だ。日本は石油を断たれ、やむなく戦争したのだ」しかし、その種を播いたのは全部日本だった。

雷金軍大打忽(伊賀郡)鐵砲隊
出征時(元和4年)御金屬器御正義
御神、主の御神持の御神。主の御神御
御神持合御神を御神御御正義御神
御御正義御神御御正義御神御御正義

（略）

1963年1月1日
植物調查(1961)記錄單—(2831)1961年
植物調查單(1961)記錄單。其中中國科學院
植物研究所植物調查記錄單。

新編古今類要

（中略）

（アーチーの胸を抱きしめる用語）
脚本は脚本家による原稿のことを指す。脚本の書類を提出する者は脚本家である。脚本の書類を提出する者は脚本家である。

西漢元帝時，王政之子王成與其弟王康，同爲郎官。王康好學，善賦，成亦能賦，但不以爲能。王康嘗賦於王政，王政大驚，謂成曰：「汝弟賦何如？」成曰：「不若康。」王政曰：「汝何不取弟賦？」成曰：「恐人嗤笑。」王政曰：「吾不責汝。」

我向來是不喜歡讀書的，但這回卻真被他說服了。我到書店裏去買了一本《史記》，一連看了好幾天，竟把那書看完了。我還在那裏讀了《水滸傳》、《西遊記》、《金瓶梅》等書，也把那書看完了。我還在那裏讀了《金瓶梅》、《西遊記》、《水滸傳》等書，也把那書看完了。我還在那裏讀了《金瓶梅》、《西遊記》、《水滸傳》等書，也把那書看完了。

一傳到日本，即為日本政府所採用。當時日本政府在中國的領事館，即將此法應用於中國人身上，並稱之為「中國化」。當時中國人對此法極為厭惡，認為是中國人自己所發明的，但被日本政府所利用，使中國人更為難堪。當時中國人對此法極為厭惡，認為是中國人自己所發明的，但被日本政府所利用，使中國人更為難堪。

（三）在於社會上，我們的社會主義者，應當是社會主義的實踐者，是社會主義的宣傳者，是社會主義的鼓動者，是社會主義的組織者，是社會主義的領導者。他們應當在社會上發揮社會主義的作用，使社會主義的思想，能夠深入到社會的各個階級中去，使社會主義的原則，能夠貫徹到社會的各個領域中去，使社會主義的政策，能夠實現到社會的各個方面中去。

（三）
（四）

「総括 明治から敗戦まで」関係年表

歴 5	1858	—— 「安政の五条約」(米・蘭・露・英・仏)調印	明治13	1938	1. 16 「爾後国民政府ヲ対手トセズ」と声明
明治18	1885	12. 22 内閣制度創設。初代首相に伊藤博文	14	1939	5. 11 満蒙国境でノモンハン事件起る
22	1889	2. 11 帝国憲法発布			8. 23 独ソ不可侵条約調印
27	1894	8. 1 日本、清國に宣戦布告。日清戦争			9. 1 第二次世界大戦始まる
28	1895	4. 17 下関で日清講和条約調印 4. 23 露・独・仏の三国干渉 5. 4 閣議、遼東半島の全面放棄決定	15	1940	6. 14 ドイツ軍、パリ入城 7. 16 米内光政内閣総辞職(燐鶴六陸相辭職)
32	1899	7. 17 条約改正実施。治外法権撤廃			7. 22 第2次近衛内閣成立。外相に松岡洋右
33	1900	5. 19 軍部大臣の現役武官制実施 6. 20 義和団、北京の各国公使館を包囲 8. 14 連合軍、北京総攻撃。公使館を解放	16	1941	9. 23 日本軍、北部仏印へ進駐 9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印 12. 18 ヒットラー、翌年のソ連攻撃命令
35	1902	1. 30 日英同盟調印			1. 8 東条英機陸相、「戦陣訓」を示達
37	1904	2. 10 ロシアに宣戦布告。日露戦争始まる 3. 27 旅順口閉塞作戦で広瀬武夫中佐戦死 5. 1 日本軍、鴨綠江を渡河、九連城占領			4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印 4. 18 野村吉三郎駐米大使から日米諒解案入電◆大島浩駐独大使は「独ソ緊迫」
38	1905	1. 1 旅順のロシア軍降伏 3. 10 奉天会戦に勝利 5. 27 日本海海戦。バルチック艦隊を破る 9. 5 ポーツマスで日露講和条約調印			6. 22 ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる 7. 7 陸軍、「閔特演」の第一次動員 7. 23 陸軍、第25軍に南部仏印進駐命令 7. 25 アメリカ、在米日本資産を凍結 7. 28 日本軍、南部仏印に進駐開始
42	1909	10. 26 伊藤博文、ハルビンで暗殺される			8. 1 米、対日石油輸出を全面禁止
44	1911	7. 17 日本、関税自主権を回復			9. 6 御前会議、「対米英蘭戦争を辞せざる決意の下に戦争準備完整」の国策
大正 2	1913	6. 13 軍部大臣の現役制武官制を廃止			10. 17 東条陸相に大命。「白紙還元の御詫」
3	1914	7. 28 第一次世界大戦始まる 8. 23 日本、ドイツに宣戦布告			10. 18 東条内閣発足。東条、国策再検討指示
4	1915	1. 18 日本、中国に「二十一か条要求」 5. 9 中国、日本の要求受諾。「国恥記念日」			11. 5 御前会議、戦争決意の国策可決
7	1918	11. 11 ドイツ降伏。第一次大戦終わる			11. 26 アメリカ、「ハル・ノート」提示
8	1919	6. 28 ベルサイユ講和条約調印			12. 1 御前会議、対米英蘭開戦を決定
9	1920	1. 10 國際連盟発足			12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃◆猛吹雪の中、独軍の悲惨な退却始まる
10	1921	10. 27 「バーデン・バーデンの密約」 11. 4 原敬首相、東京駅で暗殺される	17	1942	6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失
11	1922	2. 1 山県有朋死去 2. 6 ワシントン条約(憲撃艦、丸船)調印	18	1943	8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始
明治 4	1929	5. 19 陸大卒業生による「一夕会」発足			1. 1 中野正剛、朝日新聞に「戦時宰相論」
5	1930	4. 22 ロンドン海軍軍縮条約調印			2. 9 大本営、「ガダルカナル転進」と発表
6	1931	11. 14 浜口雄幸首相、東京駅で狙撃される 9. 18 柳条湖で満鉄爆破、満州事変始まる			4. 18 連合艦隊司令長官山本五十六戦死
7	1932	3. 1 滿州国建国 3. 28 上海事変で捕虜になった空閑昇少佐が停戦協定で送還後、ピストル自決	19	1944	9. 8 イタリア、連合軍に無条件降伏
8	1933	5. 5 五・一五事件。犬養毅首相射殺される 3. 27 日本、国際連盟を脱退			10. 26 中野正剛、割腹自決
11	1936	2. 26 二・二・六事件。高橋是清蔵相ら射殺 3. 5 広田弘毅外相に組閣の大命 3. 9 広田内閣やっと成立(駿人歌・陸軍横槍)	20	1945	2. 23 毎日新聞に「竹槍では間に合はぬ、飛行機だ、海洋航空機だ」。発禁処分に
12	1937	5. 18 軍部大臣現役武官制、23年ぶり復活 11. 26 広田内閣、日独防共協定調印 6. 4 衆望を担い第1次近衛文麿内閣成立 7. 7 蘆溝橋事件勃発。支那事変始まる 11. 5 トラウトマン(ドイツ帽樹)和平工作 12. 13 日本軍、南京を占領			7. 7 サイパンの日本軍守備隊玉碎
					7. 18 東条内閣総辞職 ◆通信院防衛施設局長の松前重義、二等兵で指名召集
					7. 22 小磯国昭・米内光政連立内閣成立
					2. 7 重臣上奏始まる(東条は26日)
					4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
					4. 7 鈴木貫太郎内閣成立
					4. 15 吉田茂、東京憲兵隊に逮捕される
					5. 7 ドイツ、連合軍に無条件降伏
					7. 26 「ポツダム宣言」(終戦勅令)発表
					8. 6 広島に原爆投下
					9. 9 ソ連軍、満州で侵攻開始◆長崎に原爆
					8. 15 敗戦。玉音放送